

ピリピ人への手紙3章8-11節 「失った代わりに得たもの」

1A 主イエス・キリストを知っていること 8

2A キリストにある者 9a

3A 神から与えられる義 9b

1B 律法にある自分の義

2B 信仰による義

4A キリストの苦しみと復活 10-11

1B キリストの復活 10a

2B キリストの苦難 10b

3B 死者の中からの復活 11

本文

ピリピ人へ手紙 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ピリピ 2 章まで来ました。午後に 3 章の前半、1 節から 11 節までを一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、その最後の部分、8 節から 11 節をじっくりと見ていきたいと思います。「⁸ **それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただとと思っています。それは、私がキリストを得て、⁹キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。¹⁰私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、¹¹何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」**

聖書には、すべてを捨ててイエスについていく弟子たちの姿があります。ペテロ、ヨハネ、その他の弟子たちが漁師でしたが、舟も網も捨てて、イエスについて行きました。もしすべてを捨てるのであれば、それだけの価値のあるものを見つけたからですね。そうでなければ、自分の大切にしているものを捨てることはできません。人は、大切なものを得るために、今まで大切にしていたものを自ら捨てることができます。大切なものを失っても、自分の得たものがいかに優れているかを知っているのです。失ったものは、どんなに高価であったとしても、どうでもよくなります。これが、パウロがここで話していることです。午後礼拝で、じっくり学びますが、彼はユダヤ人としての誇り、律法を学んだことについての誇り、エリート中のエリートだったのですが、これらのもの、キリストのすばらしさに比べたら、塵あくたにしか過ぎないと大胆に語っています。

イエス様は弟子たちに、ご自分のために捨てた者は、失ったものを補うだけでなく、ありあまるほどにしてくださいを約束されました。「ルカ 18:29-30 イエスは彼らに言われた。「まことに、あ

なたがたに言います。だれでも、神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者は、必ずこの世で、その何倍も受け、来たるべき世で、永遠のいのちを受けます。」キリスト者として生きてきた方々は、このイエス様の言葉がよく分るのではないのでしょうか？信仰をもって、この世において損をしたと思いますか？むしろ、より豊かになったと思います。もちろん、金持ちになったということではありません。けれども、損をして、すべてを奪い取られたとは全く感じません。パウロが、あらゆるものを失っても、それでも全くよしとした、その動機について見てきたと思います。

1A 主イエス・キリストを知っていること 8

8a **それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。**

なぜ全てを失ったのに、それをよしとしているのか？「**私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさ**」ということです。ペテロやヨハネなど、他の弟子たちもそうですが、イエス・キリストを知ったこと、そのことのすばらしさのゆえに、すべてを捨てるわけです。この方ご自身を知ること、それが自分の得たものです。

ここでパウロの言っている「知っている」ということは、単に知識ではありません。パウロが、キリスト教会、当時は「この道」と呼ばれていましたが、この道に対して迫害する者でありました。ダマスコにまで行って、そこにいる弟子たちを捕縛する権限を大祭司から受け取って、ダマスコに行こうとしていたのです。その彼に、イエス様が現れました。「使 9:3-5 ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」このようにして、パウロは瞬時に回心しました。これまで、イエスの名を唱える者たちを迫害していたのに、そのイエスを「主よ」と呼んでいます。イエス様が、自分に現れてくださったのです。パウロは、それを「知っている」と言っています。それがあまりにもすぐれている、と言っています。

この「知る」というのが、イエス様が「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」と言われたように、永遠のいのちを持っているかどうかの別れ目になるような大きなことであります。ユダヤ人たちが、聖書を多く知り、イエスのことを聞いて、見ているのに、それでも知っていないことをイエス様は明らかにされました。彼らとの言葉のやり取りで、イエス様は、「ヨハ 8:19 あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」と言われました。肉眼でイエス様を見ているのに、イエス様を霊的に知りませんでした。だから神ご自身をも知らなかったのです。もし知っていたら、イエスに妬みを抱き、この方を殺すようなことはしなかったでしょう。彼ら

の行いに、イエスを知らなかったことが如実に現れています。私たちがイエスを知っているのか知らないのかは、その人の生き方と行いに如実に現れます。

知るということは、御霊の働きによってイエスが、確かに神から来られた方であることを見て、信じる必要があります。その時のユダヤ人たちは、それをしていませんでした。イエスのところに来ていませんでした。だから、いわゆる知識と情報は増えていくのですが、いのちに至る知識には至っていませんでした。この方を知りたいですか？それならば、御霊がご自分に語りかけている声に聴き従いましょう。そして、イエスのところに来ましょう。

2A キリストにある者 9a

8b それは、私がキリストを得て、^{9a}キリストにある者と認められるようになるためです。

キリストを得るということが、すべてを失っても全く構わないと思わせた理由です。

昨年 11 月の聖地旅行についての証しを分かち合わせてください。それは円安とインフレで、とつもない費用にかかった旅でした。参加者のみなさんは、多大な犠牲を払っています。朝に、参加した牧師さんたちにデボーションを頼みましたが、その一人の方が、七つの教会の一つ、ラオデイキアにある教会に対してイエス様が語られた言葉を引用しました。「黙 3:18 わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精錬された金をわたしから買い、あなたの裸の恥をあらわにしないために着る白い衣を買い、目が見えるようになるために目に塗る目薬を買いなさい。」イエス様は、「買いなさい」と命じておられます。何をかうかという、イエス様ご自身を買いなさい、ということです。何十万円もする旅費を出して、何を買いたいか？と言ったら、それはイエスご自身であるということです。感動しました。それが、ここで言っている「キリストを得る」ということです。

そして次に、「**キリストにある者と認められるようになる**」と言っています。キリストの内にある者ということです。私たちは、キリストが私たちの内におられるということは、意識しやすいです。イエス様を信じて、御霊によって新しく生まれ、それで主が住んでくださっているというのは意識しやすいです。けれども、ここでは逆のことを言っています。キリストの内に私たちがいるのです。

これは、どういうことでしょうか？ちょっと、自分が自動車の中にいるとしましょう。外にいる人々は、誰かが中にいて、もしかしたら自分のことが見えるかもしれませんが。けれども、基本的にその自動車が見えていて、その中に誰かがいることを認めるということになります。キリストの内にいる者と認められる、というのはこういうことです。神の前にいる時に、また人々の前でさえそうですね、自分ではなく、キリストを神が見てくださっているということです。また人々も、「この人にはキリストがおられる」と認めることです。

自分ではなく、キリストを神が見ておられるということは、なんと幸いなことでしょうか！ピリピ書の前に学んだエペソ書には、キリストの内にいることの祝福を読むことが出来ましたね。「1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあつて、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。」キリストのうちであれば、天上にあるすべての霊的祝福をもって祝福されるのです。そして、天地が過ぎ去り、新天新地が造られ、そこにある新しい都エルサレムには、なんと私たち自身が、神とキリストの中にいるということになります。主の神殿を探しても見つからず、太陽を探しても見つかりません。けれども、光り輝いています。なぜなら、自分自身が主ご自身の中にいて、光は主ご自身の栄光だからです。

この信仰の立場を、私たちは取り続けます。自分がなんだかんだ、言っているのが、馬鹿らしくなるでしょう。そうではなく、イエス様のうちに自分がいるということで生きています。この方を見上げて、この方に抱かれているということを感じて生きるのです。そこで次の言葉があります。

3A 神から与えられる義 9b

9b 私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。

1B 律法にある自分の義

律法による自分の義ではありますが、パウロは、律法についてはパリサイ人であり、その熱心さは教会を迫害するほどであった、と 5-6 節で言っています。自分の正しさ、義を求めていたら、人を傷つける、しかもキリストの弟子になっている者たちに暴力をふるうことさえしていたのです。自分の義は、不潔な着物のようであるとイザヤ書にあります。まさに彼はそれを、イエス様を知ることによってよく知ることになりました。

私たちは、人であるかぎり根っこから、自分の行いによって自分の義で生きていこうとします。そしてそれを体系化しているのが宗教です。自分の功德によって、神にその義が認められるように生きようとしています。これだけ祈ったから、うまくいった。うまくいかなかったのは、自分の祈りが足りなかったからだ、とか。自分の身に起こっていることを、自分が何をしたか、しなかったかと、自分の義に持ってくるのです。

2B 信仰による義

しかし、「キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つ」と言っています。キリストを信じる、この方に信頼する中で生きることにすべてがあります。

では、義はどのようにして得ればよいのでしょうか？自分自身の行いではないのです。ここにあるように、「**信仰に基づいて神から与えられる義**」です。私たちではなく、神が贈り物として私たちに

与えてくださるところの義です。私たちは今、義となっていないが、神が義としてくださることを熱心に信じて待っているのです。この方を信じるところに、神との正しい関係があります。

自分が神の立場になったらどうかを、少し考えてみるといいですね。一方的に、自分がすべてを用意して、相手がそれを信頼して受け取るだけにしています。それをただ信じて、受け入れてくれさえすればよいのです。ところが、受け入れないで、「いやいや、私が自分で用意しますから。」と言ったらいかがですか？こちらは、最高級の食事を用意しているのですが、相手が、もう賞味期限が過ぎた腐った食材で料理しますと言っています。これで、正しい関係が持てますか？持てませんね？自分のしていること、自分の用意したものを、そのまま信頼して、受け取ってくれることによって喜びます。

完全な神が、その正しさを用意しておられて、そのことをただ信じて受け入れるというところで、神と正しい関わりを持つことができます。自分がどうのこうのという世界ではなくなったのです。神がどうされたのか？何をしておられるのか？何をこれからしてくださるのか？このことを能動的に知って、信じて、受け取っていくことこそが、私たちの生き方なのです。私たちの義は、神から与えられるので、その時が来るのを熱心に待っているのです。それまでは、キリストの内に見出されている者として留まっています。

4A キリストの苦しみと復活 10-11

そしてパウロの信仰の姿勢は、ただ信じて、救われたという保証だけに終わりません。もっとキリストを知りたい、この方を知ることが自分の人生で追い求めていることだと告白します。

1B キリストの復活 10a

^{10a} 私は、キリストとその復活の力を知り、

パウロの生きていることの情熱は、この方を知ることであり、ただ知るだけでなく、その復活の力を知ることです。主が三日目によみがえられて、今も生きておられることを知ることです。私たちの情熱がここにあるでしょうか？この方が、聖書に書かれてあるお方であることを、今の自分の生きている中で、知っているでしょうか？

私たちが、この方の命ずることに聞き従うことによって、キリストが確かに、聖書に書かれておられるとおりの方であることを知ることができません。前回学びましたように、従順になることです。この方が内に生きておられます。この方に命じられることを、従ってみようとすることによって、その従順に必要な力をくださるのです。生きて働いておられることを、自分自身が知ります。あまりにも多くの人が、自分をもっと知識を増し加えようとしてしまいます。知識はもちろん大事です。けれども、増し加えなければいけないのは、すでに命じられていることに従うことであり、そこでキリストの

復活の力を知るようになるのです。それが真の知識なのです。

イエス様は、「ヨハネ 20:21 父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と言われました。自分が、信仰をもって妻にも伝えて、宣教地に行きました。それで分かりました。自分には、言語能力も、文化の適用もできていません。おまけに、そこでは自分の素性を明かすこともできません。ないないづくめなのです。ところが、主が一人一人、私たちに人を連れて来られます。みことばを語ります。そして、その場ではないですが、後にイエス様を信じていきます。わざわざ、日本に旅行に来て、自分が信じたこと、キリスト者になったことを伝えてきた若者もいました。福音書に書かれているイエス様、福音宣教の働きをしているイエス様の姿を知りました。

そして帰国します。教会を始めます。牧会をします。弟子作りをします。そこで、大牧者であられるイエス様を知るようになります。今まで見えていなかった、イエス様が羊飼いとて弟子たちを養い、育てている姿を知ることができます。主が生きておられるので、憐れむべき人に憐れむ心が与えられます。自分自身であれば決して抱くことのできない心です。そこで、羊飼いいエス様がおられることを知るのです。キリストと、その復活の力を知ります。

2B キリストの苦難 10b

10b キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、

パウロがキリストを知ることは、復活の力だけではありません。なんと、この方の苦難にもあずかることを追い求めているのです。キリストの苦しみを、神の恵みであるとピリピ 1 章 29 節で話していましたね。パウロは、キリストにある苦しみとの交わりを、神の恵みとして知りたいと願っていました。アブラハムのことを思い出します。彼は、自分から子が生まれる、そしてその子によって星の数のように子孫が出てくるという約束を受けました。そしてイサクが生まれますが、なんと神が、愛する独り子を全焼のいけにえとして献げなさいと命じられます。彼はそれを実行すべくモリヤ山に行きました。そこで、彼は何にあずかったのでしょうか？キリストの苦しみです。父なる神が愛する独り子をいけにえとして献げるその苦しみを、味わったのです。

信仰の深みは、キリストの苦しみにあると言ってもよいでしょう。苦しみにあずからない人は、信仰が薄っぺらいと言ってもいいかもしれません。例えばキリストは、人々に拒まれました。私が、アメリカにいた時に、弁護士の人から永住権の取得のために動きますか？と尋ねられました。そのつもりはないと答えました。また、日本人の一部の人からいてほしいと言われました。私は断りました。キリスト者の多いアメリカ、とても住み心地がいいです。日本に帰れば、何かにもが、キリスト者としての居場所がないように思えます。しかし、少なくとも私は、アメリカにいるよりも、日本にいるほうが、キリストがおられることを感じます。なぜなら、キリストは多くの人に拒まれたからです。チラシを配っても、ほとんど受け取ってくれない現状で、キリストがご自身を公に示されても、

それでも人々がこの方を拒んだということを知ることができます。

3B 死者の中からの復活 11

¹¹何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

最後には、キリストにあつて死に、この方が戻って来られる時には、よみがえり、栄光の体にあずかります。イエス様がよみがえられた時に、そのからだは復活のからだであり、朽ちることのないからだであったように、私たちも朽ちることのない、栄光の体にかえられます。キリストにあずかるということが、その復活の力にあずかり、苦しみにもあずかり、しかも、墓からのよみがえりにも預かりたいという願いです。

このように、自分自身はすべて失っても、キリストを得ているのだというのがパウロの生き方です。そして、私たちもパウロが追及したように、追及していくことができます。